Ｎｏ.7　橋番

　武蔵の国江戸と下総国を結ぶ、大川（隅田川）に架かる両国橋。近頃、毎晩のように身投げ事件が発生する。たまりかねた町奉行の下っ端役人が橋番詰所を視察にやって来た。
　この時代、橋は最重要の社会資本であったのと同時に、戦略的にも極めて重要だったから、大きな橋には橋の管理人を置いて見張りをさせていた。これが「橋番」である。
　役人：「困るではないか！　こう毎夜毎夜身投げがあるというのは。これ以上こんなことが続くようなら、そちをお払い箱にせねばならぬぞ！」
　橋番：「ごもっともでございます。が、なにしろすばやく欄干に上ってそのまま大川にドボンですからなぁ。止めようにも止められないんでごぜぇますよ。」
　役人：「そうではない！お前がぼんくらだからだ！」
　橋番：「・・・」
　その晩。橋番が寝ずに見張りをしていると、暗闇を走り去る人影。欄干に飛び上がろうとするところを後ろから捕まえて。
　橋番：「お前だな！？！　毎晩ここから身投げをするやつは！」